

柴 宜弘氏と「中欧」

大津留厚（神戸大学名誉教授）

はじめに 「中欧」の光と影

「東欧」という概念が冷戦期共産政権下に置かれたヨーロッパ東部地域という政治的概念と地理的概念の結合として成立していた時、その意味での東欧の西に広がるヨーロッパを「中欧」と意識することは難しかった。東西対立の世界では、「東欧」に対置されるのは、「西欧」でしかあり得なかった。したがって、「中欧」が出現するのは東欧共産党体制が崩壊する1989年以降と考えることができる。実際に国際的に見ても、日本で見ても、それ以降「中欧」ないし「中央ヨーロッパ」あるいは「中・東欧」「中欧・東欧」などの表現は定着した感がある。しかしこの30年のこの地域の「歴史」には光と影がある。

ハンガリーのキューセグにある高等研究所長フェレンツ・ミスリヴェツ（Ferenc Miszlivetz）は、この地域の30年間を総括して次のように述べている。「市場経済と民主化は1989年ないし90年には後戻りできないものとなった。未知の世界への飛躍が始まった。ヨーロッパ委員会、NATOそしてEUへの加盟という、その後15年間に起こった欧州・大西洋世界への統合過程は、滞りなく進行し、避けて通れない、不可欠のプロセスだった。それがコインの表とすれば、コインの裏は、それほど順調でもなく輝かしいものでもない。この地域は世界観でも、将来像でも、価値観でも、絆でも、アイデンティティでも、個々にバラバラなままである。しかも「ヨーロッパ」、すなわち金ぴかの西欧は異なる者、他者に対して寛容さを欠き、包容力を失ってきている。かくして、自由と民主主義の実現に果たした役割に対して相互に理解力を失った結果として、新しいヨーロッパ建設の日々は一体感を作り出すよりも違和感を広げてしまったのである」¹。

この報告では、「中欧」が言葉として定着していく一方で「その後」の歴史を踏まえて、もう一度この地域の概念としての可能性を再考しながら、城西大学中欧研究所の所長を務めた柴宜弘氏の研究の「現在」を考えてみたい。

¹ Ferenc Miszlivetz, "Preface", Emil Brix and Erhard Busek (eds.), *Central Europe Revisited: Why Europe's Future Will Be Decided in the Region*, London/New York: Routledge, 2022?

1. 中欧とドイツ

城西大学中欧研究所のE-ジャーナル『中欧研究』の創刊の辞で柴宜弘氏は、「東欧」研究で始まった日本の「中欧」研究の特性を丁寧に論じたあとで、1993年に『東中欧の歴史地図』を編纂したマゴチ(Magocsi, Paul Robert)を参照して次のように「中欧」を位置づけた。「西側ではドイツの東部地域（ブランデンブルク、ザクセンなど）とバイエルン、オーストリア、イタリア北東部（ヴェネツィア）、東側ではリトアニア、ベラルーシ、ウクライナ西部、モルドヴァ、小アジア西部までを含んでいる。ここで示される東中欧は、日本で考えられてきたオーストリアとギリシアを含む東欧という地域概念よりさらに広い概念である。マゴチはこの広義の東中欧という地域は、まさにヨーロッパ（西はジブラルタル海峡からウラル山脈まで）の西部と東部の中央に位置しているので、正確には中欧と呼ばれるべきと述べている」。

また柴宜弘はマゴチに関連して拙編著『中央ヨーロッパの可能性—揺れ動くその歴史と社会』に触れ、そこでは「ロシアとドイツに挟まれた地域を東欧とすれば、中欧はこの東欧プラス『広い意味でのドイツ』である。『広い意味でのドイツ』とは『民族ドイツ』のことではなく、ドイツ系君主の支配領域、およびドイツ系住民と不断に接触してきた地域のことであり、スイスの大部分、デンマークの南部、イタリアの北部にもおよんでいる」、と指摘している²。問題は「ドイツ」の位置づけになる。

もともと「中欧」概念はドイツ発祥であったと言えるだろう。19世紀半ばにオーストリアの商務相、財務相を務めたブルック（Bruck, Karl Friedrich von）のオーストリアを基軸とした経済圏としての「中欧」にしても、世界大戦を共有することで一体性を増したドイツとオーストリア＝ハンガリーが「西欧」と「ロシア」のはざまに現出した「中欧」を見たナウマン（Naumann, Friedrich）にしても、その時々ドイツ世界を前提に構想されたものが「中欧」であった。しかし、例えば先に引用したフェレンツ・ミスリヴェツが序文を寄せた『中央ヨーロッパ再考』では、「中欧」をドイツとロシアの間に広がる地政学的空間として定義している。そしてフェレンツ・ミスリヴェツはそこに「ドイツに対する暗黙の政治的配慮」が働いているとする。つまりナチ政権のもとで「生存権」としてのこの地

² 柴宜弘「『中欧研究』の創刊に寄せて—中欧をどのように捉えるか」

Electronic Journal of Central European Studies in Japan, I (2015). 大津留厚編著

『中央ヨーロッパの可能性—揺れ動くその歴史と社会』（昭和堂、2006年）。

Paul Robert Magocsi(ed.), *Historical Atlas of East Central Europe*, Seattle: University of Washington Press, 1993.

域の支配を目論んだ存在としてのドイツには敢えて触れないでおこう、ということになる。そのナチ政権のドイツを逃れてアメリカ合衆国に安住の地を求めた人々にとっても、「中欧」はやがて分裂することになる。

2. 中欧の分裂と統合

第2次世界大戦の最中、ナチ政権のドイツがこの地域を席卷した時、アメリカ合衆国に逃れてきた人々とアメリカ合衆国の研究者とが中核になって1941年4月、*Journal of Central European Affairs* が創刊された。この雑誌は初め104人の購読者しかいなかったという。この雑誌に掲載された論説の多くはハプスブルク君主国とその後のオーストリアとハンガリーに関することだったが、その扱う学問領域は広範で、およそこの地域に関心を持つ人々に貴重な情報を提供していた。しかしその発足当初からこの雑誌は財政難に悩み、1964年に廃刊に追い込まれることになる。ところが *Journal of Central European Affairs* が廃刊されると、その雑誌が果たしてきた役割が改めて認識されて、それに代わる雑誌がほぼ同時に三種発刊されることになった。それが *Austrian History Yearbook* であり、*Central European History* であり、*East European Quarterly* だった。

どの雑誌も決して排他的ではなかったが、*Central European History* は「ドイツ」の影響の及ぶ領域を主な対象としていた。それに対して *Austrian History Yearbook* は、ハプスブルク君主国ないしはその崩壊後のオーストリア、ハンガリーが主な対象となり、*East European Quarterly* は冷戦期の「東欧」が主な対象となる。その意味で *Journal of Central European Affairs* が「分裂」してこの三つの雑誌が成立したとすれば、アメリカ合衆国とそこに集った「中欧」出身者の共通の場としての「中欧」の分裂を体現していると言える³。

この項の表題を「中欧の分裂と統合」としたが、それは林忠行氏の『中欧の分裂と統合』を参照した⁴。その場合の「分裂と統合」は中欧の内部における分裂と統合である。林氏は1993年1月1日にチェコスロヴァキア

³ R. John Rath, 'Obiter Dictum,' *Austrian History Yearbook*, Vol. 1(1965), pp. 1-3. <https://www.cambridge.org/core/journals/austrian-history-yearbook/article/abs/obiter-dictum/00B662819657D1F7A01B8B5A4D998ECD> (最終確認 2022年2月9日)。

'From the Editors,' *Central European History*, Vol. 1, Issue 1(March, 1968), p. 3. <https://www.cambridge.org/core/journals/central-european-history/article/from-the-editors/1638CADDCE5E746582CCC4AC3B103F86> (最終確認 2022年2月9日)。

⁴ 林忠行『中欧の分裂と統合』(中公新書、1993年)。

が分裂し、対外主権をそれぞれ有するチェコとスロヴァキアが成立したのを目の当たりにして、「中欧の長い歴史を振り返れば、国家の離合集散はいくどとなく繰り返されてきたことである」と冷静に指摘した。その背景には、おそらくそのチェコスロヴァキア国家を生んだ T・G・マサリク自身の「予言」があったからだろう。「マサリクは将来の国際関係について次のように説明する。『歴史は統合の過程であると同時に、分解の過程』でもあり、『組織化された多様性へと歴史は向かっている』すなわち、ヨーロッパは『民族国家』へと分解する一方で、それらを単位とする『連邦』を形成しつつある」。それぞれの単位への分解と一旦分解された単位が再結合される契機が同時に存在するその舞台として中欧があるとすれば、それをどこよりも具現化したのがユーゴスラヴィアの統合と分裂のプロセスだった。

3. ユーゴスラヴィアの分裂と「再生」

柴宜弘氏は『新版ユーゴスラヴィア現代史』（岩波新書、2021年）において「ユーゴスラヴィア」の形成を丁寧に論じたあとで、その解体の原因を考察している。それは、①19世紀にユーゴスラヴィアに結実する南スラヴ主義が形成されるが、それと並行的にセルビア人、クロアチア人、スロヴェニア人という民族的なイデオロギーもまた強い影響を持ち続け、ユーゴスラヴィアという統一的なイデオロギーが容易に浸透しなかった。そして最終的にはそれぞれの地域でナショナリズムを煽り立てた政治家や知識人がそのいわば潜在的な民族主義を利用したこと、②第2次世界大戦後、パルチザン戦争を経て形成された社会主義ユーゴの自主管理社会主義システムプラス連邦制が限界を露呈したこと、③国際社会がその解体に一定の役割を果たしたこと、の3点に集約される。同時に柴氏はジグザグな道をたどりながら旧ユーゴ諸国が和解の道を進んでいることを評価し、だからこそ「ユーゴスラヴィア現代史」はまだ幕を下ろしていない、ということになる⁵。

そこからもう一度柴氏の近業を見てみよう。一つは拙編著『「民族自決」という幻影—ハプスブルク帝国の崩壊と新生諸国家の成立』に寄せた「それぞれのユーゴスラヴィア—セルビア義勇軍の理念と実態」である。主にロシアで捕虜になったハプスブルク軍兵士から構成されたセルビア義勇兵の多様な構成とそれぞれの「思い」を論じた後で、「1931年6月、『大土地所有廃止に向けた土地改革法』が制定され、義勇兵は既存の地方自治体で土地を入手するか開拓地へ入植するか、いずれかの形でようやく土地を保有できるようになる。ユーゴスラヴィア王国政府は義勇兵を国民統合の中心的な存在と見なし、戦後10年以上経てなお不安定であったハンガリー、ルーマニア、ブルガリア、アルバニアとの国境地域に彼らを入植させた」。しかも「第2次世界大戦後は義勇兵の存在は人々の記憶から消し去ら

⁵ 柴宜弘『ユーゴスラヴィア現代史 新版』（岩波新書、2021年）。

れてしまったのである」⁶。柴宜弘氏はそこで一旦歴史から消し去られた義勇兵に光を当て、そこに「様々なユーゴスラヴィア」の実際を見ようとしている。この問題意識は論文「新生国家から遠く離れて一戦間期のトドロヴィチの活動（1）」にも共通している⁷。日本という異国に住んで祖国「ユーゴスラヴィア」に思いを馳せるトドロヴィチへの柴宜弘氏の深い共感が読み取れる。そしてトドロヴィチがセルビア人・クロアチア人・スロヴェニア人王国の代表として尽力したハプスブルク帝国の兵士として日本の捕虜収容所に抑留されていた南スラヴ系の人たちの帰還について次のように述べて筆を置いている。「青野原収容所の71名が神戸から、習志野収容所の9名が横浜から合わせて80名が新生の『未知の国』への帰国の途について」。

おわりに

国際社会の中で小国でありながら自立を貫き、独自の社会主義国家を作ろうとした「ユーゴスラヴィア」という存在への共感が柴宜弘氏の研究と教育への情熱の「熱源」だったことは論を俟たないだろう。その氏の遺稿は南スラヴ出身者が故郷に帰るべく乗船した帰還船の船出を「未知の国」への旅たちと表現した。そこに柴氏自身がもう一度既知としてのユーゴスラヴィアではない未知のユーゴスラヴィアを作り上げていこうとする意志が表現されているのではないだろうか。「新生国家から遠く離れて一戦間期のトドロヴィチの活動（2）」を読みたいと思うのは筆者だけではないだろう。

⁶ 柴宜弘「それぞれのユーゴスラヴィア—セルビア義勇軍の理念と実態」大津留厚編『「民族自決」という幻影—ハプスブルク帝国の崩壊と新生諸国家の成立』（昭和堂、2020年）、p. 59.

⁷ 柴宜弘「新生国家から遠く離れて一戦間期のトドロヴィチの活動（1）」*Electronic Journal of Central European Studies in Japan*, VI (2021), pp. 1-18.